

# 安中城 III

—安中地区学童クラブ建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2020

群馬県安中市教育委員会

## 序

安中市の南東部、碓氷山地の東端に位置する安中地区は碓氷川とその支流の九十九川が流れしており、この2本の河川に挟まれた段丘上に安中城が位置しています。

このたび、安中市が計画した安中地区学童クラブ建設事業を行うにあたって安中城Ⅲの発掘調査を実施しました。安中城Ⅲの周辺では、平成23年度に安中市文化センター駐車場建設事業・安中市立安中小学校校舎建て替え事業に際して安中城Ⅰ・Ⅱの発掘調査を実施しました。その際には縄文時代、古代、中世、近世の遺構・遺物が検出されております。今回の調査地である安中城Ⅲでは、中世から近世の安中城に伴う堀・土塁を確認することができました。本報告書はこの発掘調査の成果をまとめたものです。本報告書を学術分野あるいは地域の郷土史を学ぶ資料として活用していただけることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査に参加された皆様、報告書刊行に至るまでにご指導・ご協力をいただいた皆様に感謝申し上げる次第です。

令和2年3月31日

安中市教育委員会  
教育長 竹内 徹

## 例言

1 本書は安中市保健福祉部子ども課が計画した、安中地区学童クラブ建設事業に伴う安中城Ⅲ（略称：D-32）の発掘調査報告書である。

2 安中城Ⅲは安中市安中三丁目字西町21番1に所在し、調査面積は約455m<sup>2</sup>である。

3 発掘調査及び資料整理は令和元年（平成31年度）に安中市教育委員会が直営で実施した。

4 発掘調査期間は令和元年5月7日から5月15日で、資料整理は令和元年5月16日から令和2年1月31日まで断続的に実施した。

### 5 調査組織

教育長 竹内 徹

教育部長 高橋 信秀

文化財保護課長 齋藤 勝彦

埋蔵文化財係長 井上 慎也（事務総括）

主事補 関根 史比古（発掘調査・資料整理担当）

主事補 鳥居 貴庸（発掘調査・資料整理担当）

発掘調査従事者 今井 保美、岩井 英雄、岩坂 康男、清水 正、村椿 健

資料整理従事者 大月 圭子、中里 徳子、廣上 良枝、町田 千明

6 本書の編集・執筆は関根・鳥居が行った。

7 遺構および遺物の写真撮影、遺物実測は関根・鳥居が行った。

8 発掘調査の記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

## 凡例

- 1 遺構実測図の縮尺は全体図：1/200、遺構断面図：1/120とした。
- 2 遺構図中の北マークは磁北である。座標値は旧日本測地系である。
- 3 遺物実測図および遺物写真的縮尺は次のとおりである。
  - ・遺物：1/2，1/3
- 4 土層説明中での記号、略称は次のとおりである。
  - ・土層名称及び量の基準：「新版標準土色帖」による。
  - ・色調「<」：より明るい方向を示す（暗<明）
  - ・しまり、粘性 ◎：あり ○：ややあり △：あまりない ×：なし
  - ・混入物の量 ◎：大量（30～50%） ○：多量（15～25%） △：少量（5～10%）  
※：若干（1～3%）
  - ・混入物 RP：ローム粒子（溶け込んだ状態） RB：ロームブロック（固まりの状態）
- 5 本文・図面で示す火山灰の名称は、以下の記号を用いた。
  - ・浅間 A 軽石 = As - A

## 目次

序	
例言	
凡例	
第1章 発掘調査の経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
第3章 遺構と遺物	3
第4章 調査のまとめ	11
写真図版	
抄録	

## 第1章 発掘調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

平成31年4月2日、安中市保健福祉部子ども課より安中市教育委員会文化財保護課に、安中地区学童クラブ建設事業に係る埋蔵文化財についての照会があった。開発予定地は、埋蔵文化財詳細分布調査等によって中・近世安中城の堀が廻っていたことが判明している。そのため、平成31年4月3日に埋蔵文化財発掘調査を実施する必要がある旨を回答し、平成31年4月9日に子ども課より発掘調査依頼が提出された。これを受け本遺跡を安中城Ⅲ（安中地区学童クラブ建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査）とし、令和元年5月7日から5月15日の期間で本調査を実施し、記録保存を図ることにした。

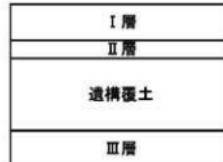
### 第2節 経過

今回の開発地域に安中城関連の堀が存在することは、安中城図や絵図と現在の地形を合わせ考えてみると、ほぼ確実であった。よって調査の主眼を堀の規模と走行を確認することに置いた。5月7日にバックホーを搬入しトレーニングの掘削を開始した。1号トレーニングは堀の位置と規模を確認するため、開発地東側、南北方向に設定した。1号トレーニング北側で堀が確認でき、堀の底部まで完掘した。2・3・4号トレーニングは1号トレーニングで確認した堀が廻る方向を確認するために設定し、堀の平面プランを確認した。

遺構の平面測量は平板測量を基本とし、スケールは全体図1/100とした。断面測量については原則1/20で行った。遺構の記録写真は、デジタルカメラと35mmカラーフィルムで閑根・鳥居が撮影を行った。作業風景等も適宜撮影した。全ての作業が終了した令和元年5月15日より埋め戻しを開始し、同日中に完了した。

### 第3節 基本層序

安中城Ⅲの層序については第1図の通りである。I層の現代の耕作土を取り除くと、II層としたAs-Aを含む層が部分的に確認できる。II層が確認できない箇所については、上層であるI層の耕作によって削平されたものと考えられる。II層より下層は遺構内埋土となる。遺構の最下面ではIII層としたハードローム層が確認できた。遺構の確認はI層・II層（As-Aを含む）を取り除いた面で行った。



第1図 安中城Ⅲ基本層序

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

安中市は群馬県の南西部に位置している。市内には、長野県との県境付近に源を発する碓氷川と、その支流である九十九川が西から東方向へ平行するように流れる。それぞれの河川の両側には河岸段丘が発達し、河川に並走するように丘陵が延びている。河岸段丘は下位段丘面（磯辺地区、人見地区）、中

位段丘面（原市・安中台地）、上位段丘面（横野台地）から成る。安中城Ⅲは、中位段丘面（安中面・原市面）の東端部分である安中市安中字西町に位置する。本遺跡の北側には九十九川との間に急峻な傾斜地が存在し、東側から南側にかけては北側よりゆるやかな傾斜地が存在する。このように遺跡地周辺は西側を除くと、河川と傾斜地に囲まれた要害の地である。

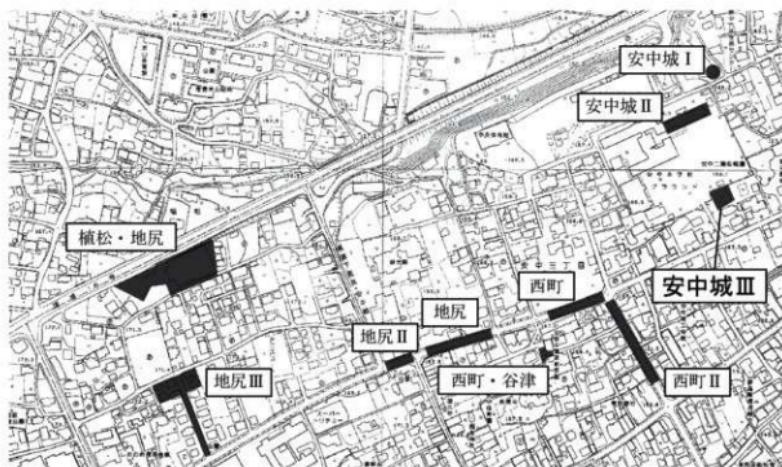
## 第2節 歴史的環境（第2図）

安中城Ⅲ周辺の遺跡について各時代を概観する。

旧石器時代の遺跡は確認できない。縄文時代は植松・地尻遺跡で草創期と推定される石器が出土したほか、中期の土坑と遺物が検出されている。また、西町・谷津遺跡では前期から後期にかけての土器が出土している。弥生時代から古墳時代にかけては植松・地尻遺跡があり、弥生時代中期後半と古墳時代の集落が確認されている。

古代（奈良・平安時代）は植松・地尻遺跡で「評」と記された刻書土器とともに、柱穴 140 基以上が検出され、掘立柱建物跡が複雑に重なり合っている様子が確認された。当遺跡は碓氷評家（郡家）の一施設または駅家と推定されている（関口 2003）。また地尻遺跡、地尻Ⅱ遺跡、地尻Ⅲ遺跡、植松・地尻遺跡では集落がみられる。

中世以降は、地尻遺跡、地尻Ⅱ遺跡、西町・谷津遺跡、安中城Ⅰ、Ⅱで安中城に関係する遺構が確認されている。地尻遺跡、地尻Ⅱ遺跡では戦国期と思われる大規模の堀が確認された。西町・谷津遺跡では永禄 2 年（1559 年）に安中忠政の築城時に形成されたと考えられる堀を検出した。安中城Ⅰ、Ⅱでは安中城の中世期の堀切と近世期の堀、石組・土壙状遺構、集石遺構、土坑などを検出した。この調査では中世期の堀切は人為的に埋め戻され、その一部は近世期の堀と重複する様子が確認された。



第2図 安中城調査位置図 (S = 1/6000)

第3章 遺構と遺物

## 第1節 遺構（第4～6図）

### (1) 調査の概要

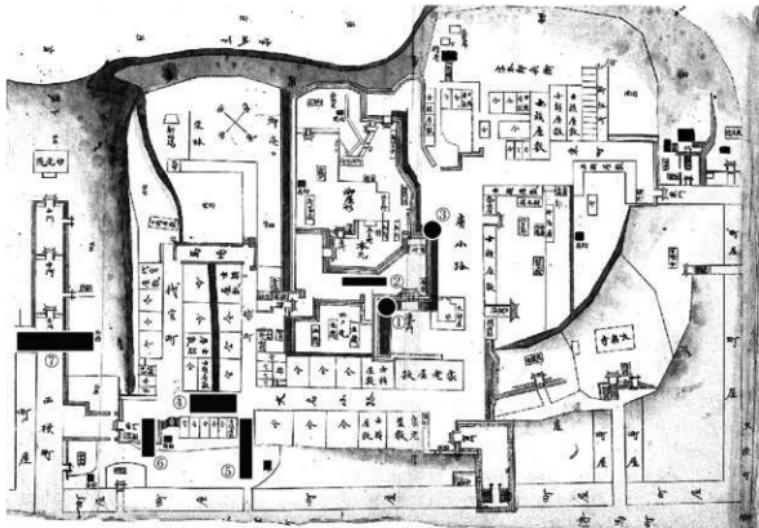
本調査区は、安中城図（第3図）および平成23年に安中市教育委員会でおこなわれた安中城I・IIの発掘調査成果から、安中城南側の堀に相当する場所であると想定された。調査区に該当する第3図-①の堀の走行状況をみると、東西方向から南向きに折れて廻ることが想定できる。そこで本発掘調査では、安中城南側堀の走行状況を把握することを主目的に、トレンチ発掘調査をおこなった。

調査成果から安中城における中世から近世にかけての堀の存在が確認できた。堀の走行は第3図とは異なり、調査区を東西方向に直線的に廻っていることが判明した（図4）。

## (2) 各トレーニングの概要 (第5図)

### 【第1 トレンチ】

第1トレンチは第3図から想定される堀に直行させるように、調査区の北東端、南北方向に縦11m、横2mで設定した。はじめに、堀の全容を把握する目的でトレンチ北側部分（堀に該当する箇所）を



①安中城Ⅲ ②安中城Ⅱ ③安中城Ⅰ  
 ④西町 ⑤西町Ⅱ ⑥西町・谷津 ⑦地居、地居Ⅲ

第3図 安中城図と調査箇所（『安中町郷土誌』より加筆して転載）

中心に掘削をおこなった。その結果、地表下4m付近で堀の底面を確認した。その後、堀の底面から延長させる形で南側を掘り進め、堀の立ち上がりを検出した。

第1トレンチ東側の土層断面（第5図）をみると、堀の南側に人口的に盛土をした痕跡が確認できた。この盛土がどの範囲まで延長するかを確認するため、トレンチ南方向に4mほど拡張した。その結果、盛土はトレンチ北端部から13m付近で切れることが判明した。

#### 【第2トレンチ】

第2トレンチは、第1トレンチで検出した堀の走行状況を確認する目的で縦6m、横2mのトレンチを第1トレンチに直行させる形で設定した。第2トレンチは地表下2m付近まで掘り下げたが、第1トレンチで検出した堀の掘り方や盛土は確認できなかった。そのため、第2トレンチ全体が堀の内部に位置することが判明した。

#### 【第3トレンチ】

第3トレンチは、縦8.5m、横1mのトレンチを調査区中央南北方向に設定した。本トレンチも第1・2トレンチ同様、堀の走行状況を確認する目的で設けており、第3図-①にあたる場所と想定された。掘削の結果、トレンチ北端部の地表下1m付近で東西方向に廻る堀の落ち込みを確認した。

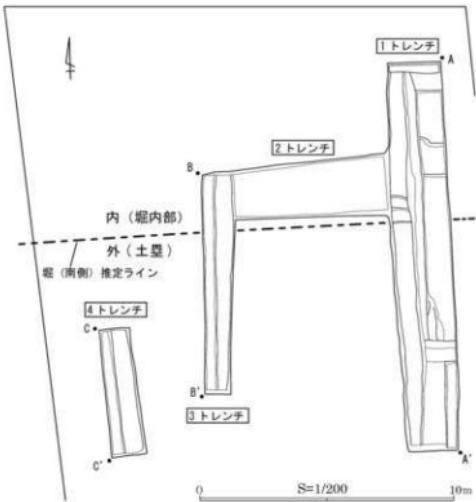
本トレンチの南側では、地表下1m付近で平坦な疊敷きの黄橙色土（図5中の18）を検出した。表層に薄い黒色土が混じることから、堀が存在していた時期の地表面と推測した。

#### 【第4トレンチ】

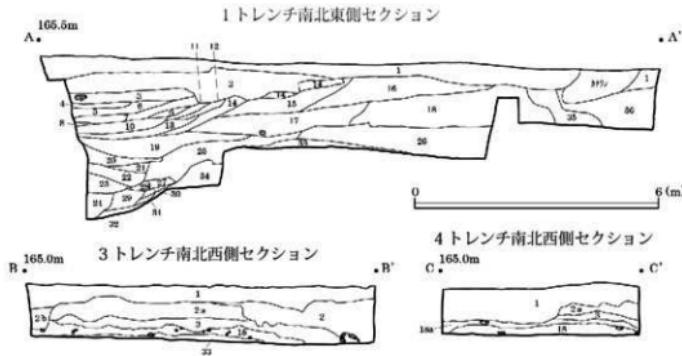
第4トレンチは、第3トレンチでは確認できなかったクランク状の堀を確認する目的で、調査区南西部分に縦5m、横1mで設定した。調査の結果、第4トレンチでは堀の落ち込みは確認できず、第3トレンチで検出した黄橙色土を呈す地表面を地表下1m付近で検出した。

#### （3）安中城Ⅲにおける堀の走行状況

第1～4トレンチの調査成果から、安中城南側の堀の走行状況が明らかとなった。第3図では、東西方向に堀が廻り、調査区の中ほどで南向きに直角に折れる堀の走行が想定されている。しかし、発掘調査では、第3図-①のような走行は確認できなかった。第1～3トレンチまでの様相をみると、堀は東西方向に廻っている。また、第4トレンチでは堀が確認できなかったことから、本調査区において安中城南側の堀は、東西方向に直線的に廻っていたと推測される（図4）。第3図に記される堀の走行は、調査区の範囲外であるか、検出した堀とは異なる時期のもとの想定される。

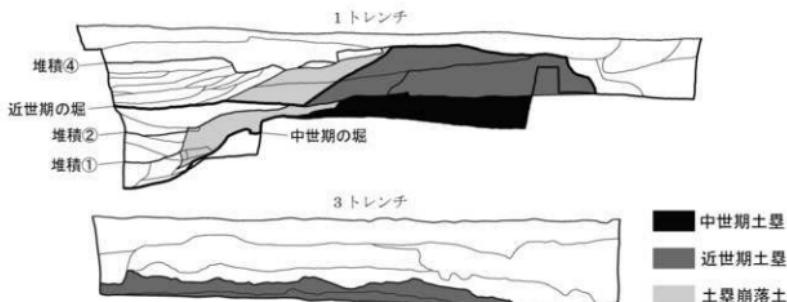


第4図 安中城Ⅲトレンチ配置図



透構名	層番・層名	色調	しわ	粒性	剖面		
					RP	RB	Ar-A'
<b>1 レンチ</b>							
1 現耕作土							I型に相当
2 白灰色土層10YR	1<2	x	x	x	x	x	A絆石だらけ
3 黒色土層10YR	2>3	○	○	※	※	※	
4 黒褐色土層10YR	3>4	○	○	※	※	※	
5 黒褐色土層10YR	4>5	○	○	※	※	※	
6 深青色土層11YR	5<6	△	○	○	△	×	
7 暗褐色土層10YR	6<7	○	○	○	○	△	
8 黑褐色土層10YR	7>8	○	○	○	○	○	
9 黑褐色土層10YR	8>9	○	△	○	○	○	
10 暗褐色土層10YR	9>10	△	○	○	○	○	
11 暗褐色土層10YR	10<11	△	△	○	○	○	
12 暗褐色土層10YR	11>12	△	△	○	○	○	
13 深青色土層11YR	12<13	△	△	○	○	○	
14 黄褐色土層10YR	13>14	○	△	△	○	○	
15 黄褐色土層10YR	14<15	○	○	○	○	○	II型に相当か
16 黄褐色土層10YR	15>16	○	○	○	○	○	黒色土が多量に混じる
17 黄褐色土層10YR	16<17	○	○	○	○	○	黒色土が多量に混じる
18 黄褐色土層10YR	17>18	○	○	○	○	○	黒色土が少量に混じる
19 黑色土層10YR	18>19	△	△	△	△	×	
20 黄褐色土層10YR	19>20	△	△	○	△	×	
21 黑褐色土層10YR	20>21	○	○	○	○	+	黒色土が少量に混じる
22 黄褐色土層10YR	21<22	△	△	○	○	+	黒色土が少量に混じる
23 黄褐色土層10YR	22>23	△	○	○	○	+	黒色土が少量に混じる
24 黑色土層10YR	23>24	○	○	※	+	+	
25 黑褐色土層10YR	24<25	○	△	○	○	+	
26 黑褐色土層10YR	25>26	○	△	○	○	+	
27 黑褐色土層10YR	26<27	△	△	○	○	+	
28 明黄褐色土層10YR	27>28	△	△	×	○	+	黒色土が少量に混じる
29 黑褐色土層10YR	28>29	○	○	○	○	+	
30 明黄褐色土層10YR	29>30	○	○	○	○	+	
31 黑色土層10YR	31>32	○	○	○	○	+	
32 明黄褐色土層10YR	31<32	○	○	○	○	+	黒色土が多量に混じる
33 明黄褐色土層10YR	32>33	△	△	+	+	+	黒色土が多量に混じる
34 黄褐色土層10YR	33<34	x	x	x	x	+	Ⅲ型に相当
35 明黄褐色土層10YR	34>35	△	○	○	○	+	黒色土が多量に混じる
36 黑色土層10YR	35>36	○	△	○	○	+	
<b>3 レンチ</b>							
1 現耕作土							I型に相当
2a 黑褐色土層10YR	1>2	△	x	x	x	x	
2a 黑褐色土層10YR	2>2a	x	x	x	x	x	A絆石だらけ
2b 黑褐色土層10YR	2a>2b	x	x	x	x	x	
3 黑褐色土層10YR	2b<3	○	○	○	△	+	
4a 黑褐色土層10YR	3>1a	△	○	○	○	+	黒色土が多量に混じる
4a 黑褐色土層10YR	1a<1b	○	○	x	○	+	黒色土が多量に混じる
<b>4 レンチ</b>							
1 現耕作土							I型に相当
2a 白灰色土層10YR	1<2a	x	x	○	x	○	A絆石だらけ
3 黑褐色土層10YR	2a>3	○	○	△	x	x	
4a 黑褐色土層10YR	3>1a	△	○	○	○	+	黒色土が多量に混じる
4a 黑褐色土層10YR	1a<1b	○	○	x	○	+	黒色土が多量に混じる

第5図 第1・3・4土層断面図 (S = 1/120)



第6図 堀の形態と堆積過程

## 第2節 遺物（第7～9図）

### （1）遺物の概要

安中城Ⅲでは、中世期と近世期に城郭を廻っていたと考えられる堀跡を検出した。遺物は近世期の堀の覆土から出土しており、遺構に伴うものはない。近世期の堀跡より下層では、須恵器片2点（第9図-60、61）を除いて、遺物は確認できなかった。

検出した主な遺物は陶磁器、土師質土器、須恵器、土師器、硯、瓦である。このうち陶磁器、土師質土器などの18世紀から19世紀の遺物が多数を占める。17世紀に比定される肥前系の中皿1点（第8図-29）と志野焼きの皿2点（第8図-33・34）も確認されるが、遺物組成ではごく少数である。

陶磁器、土師質土器の主な産地は瀬戸・美濃、肥前系が最も多くの割合を占める。その他には萩系の碗1点（第8図-25）、益子・相馬系の蓋1点（第8図-41）、信楽系の小杯2点（第7図-2・4）が確認できる。

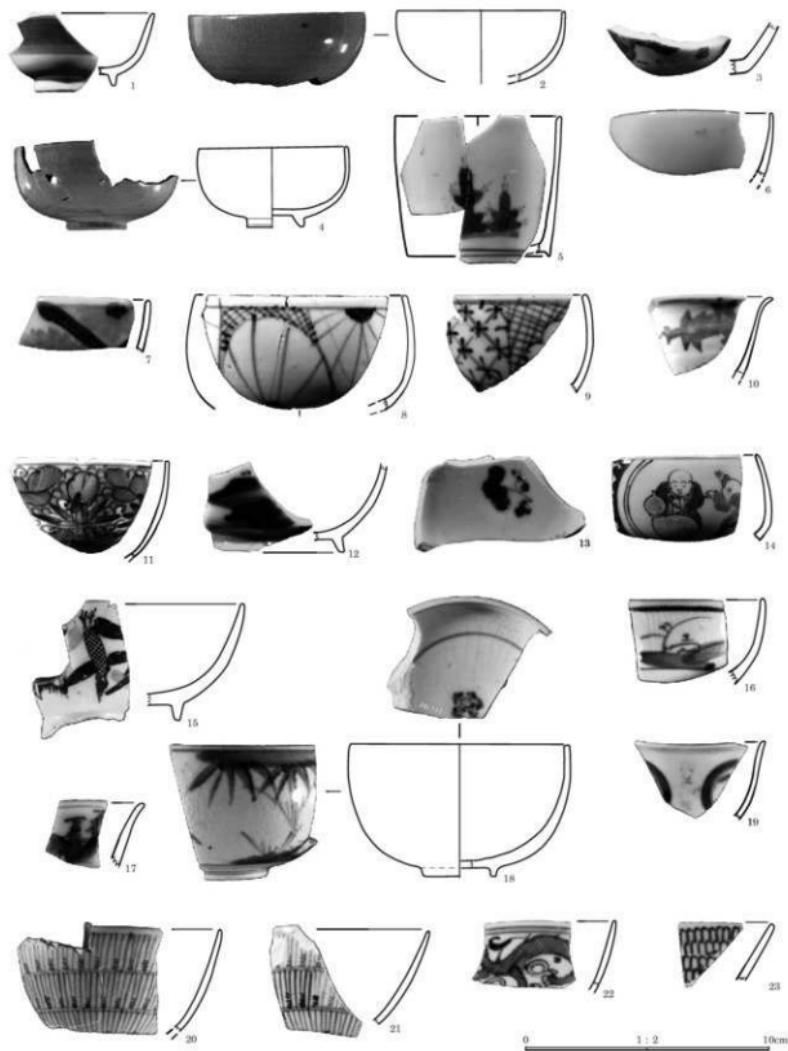
また、若干数ではあるが、須恵器や土師器も確認された。須恵器は合計5点あるうち、10世紀頃に比定される高台付きの碗（第9図-57）と8世紀頃に比定される蓋（第9図-61）が確認できる。土師器では4世紀頃に比定される高杯も確認された（第9図-54）。

### （2）安中城Ⅲにおける遺物総括

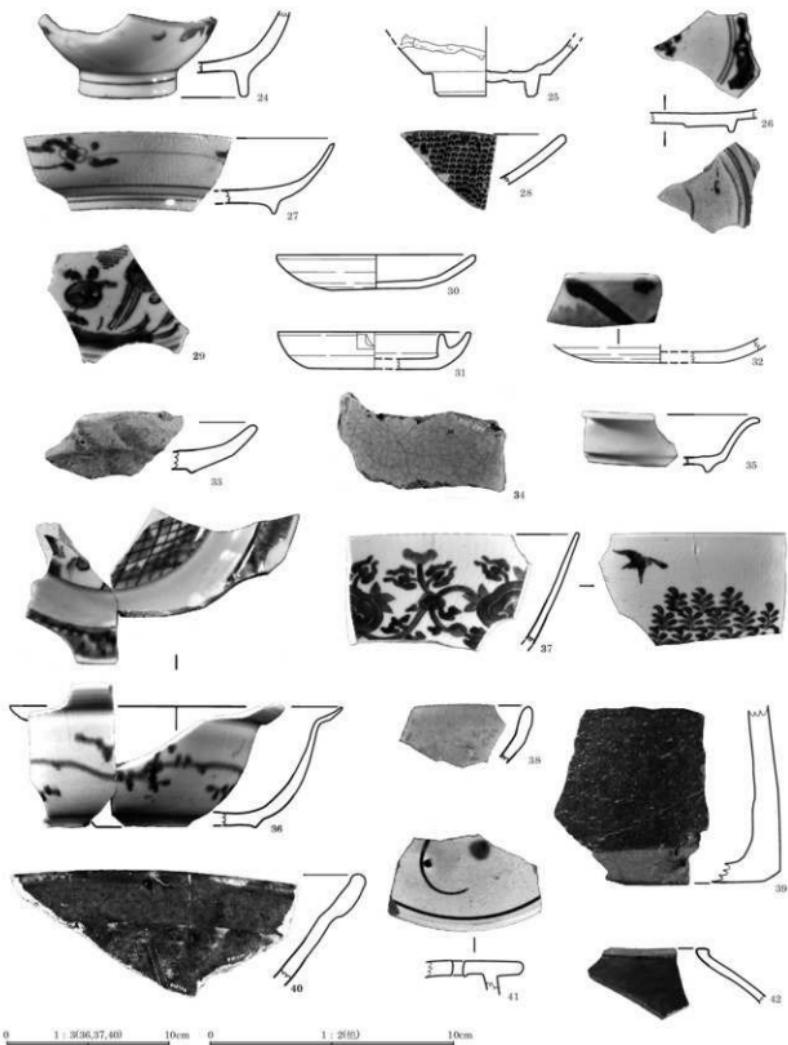
安中城Ⅲの出土遺物の大半は、おおよそ18世紀後半から19世紀初頭に比定される陶磁器や土師質土器であった。これらのなかには17世紀代の遺物も数点確認される。これらの遺物は出土位置が近世期の堀の覆土であることから、18世紀から19世紀まで伝世したものと考えられる。

須恵器、土師器には上述の時期とは大きく異なるものが確認できる。これらの出土位置は、近世期の堀の覆土もしくは人口的に造成された盛土の中であることから、混入とみるのが自然である。

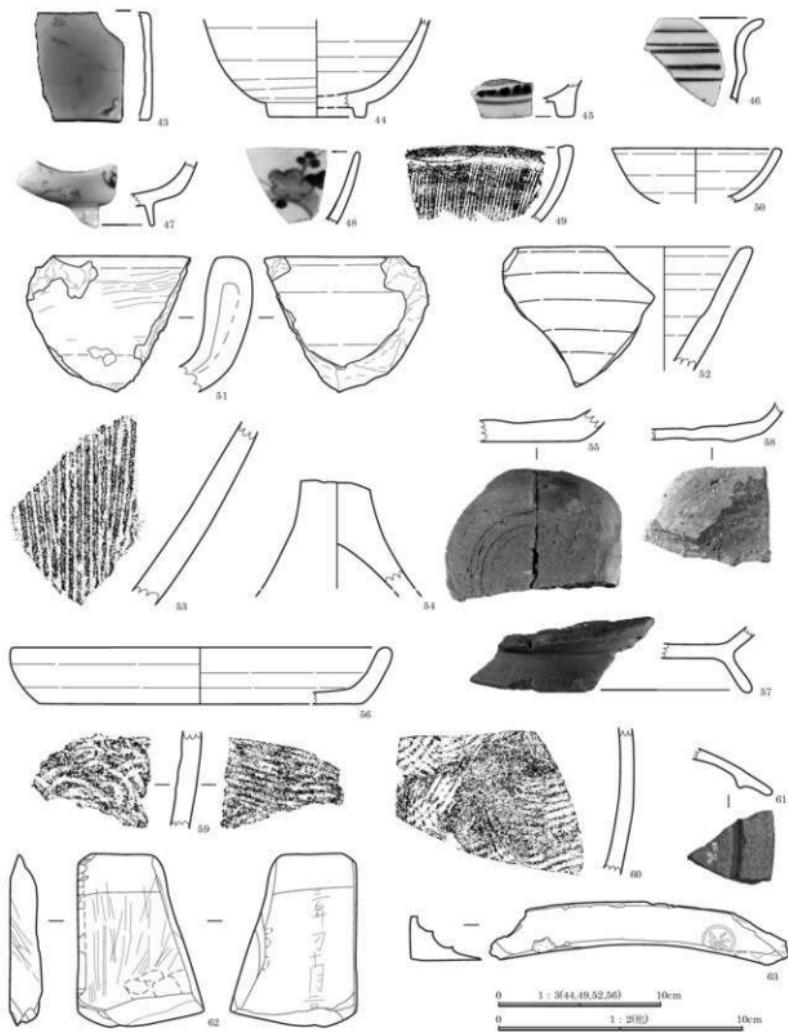
遺物が出土した近世期の堀は、天明3年（1783年）の浅間山の噴火後に一定期間を経て埋没したことが、堀の覆土堆積状況から理解できる。本発掘調査における出土遺物の帰属時期を遺物組成からみた際、基本的に18世紀後半から19世紀初頭に位置づけられる。したがって、安中城Ⅲの遺物は近世期の堀が埋没する過程で廃棄されたものと想定される。



第7図 安中城III出土遺物①



第8図 安中城Ⅲ出土遺物②



第9図 安中城Ⅲ出土遺物③

# 遺物観察表

## 陶磁器

遺物番号	種別	器種	高さ(cm)	口径(cm)	底径(cm)	出土位置	生産地	年代	備考
21	土器	小鉢	3.3	—	2.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
22	土器	小鉢	—	—	7.9	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
31	土器	小鉢	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
41	土器	小鉢	2.1	6.3	2.4	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	側面輪足
42	土器	小鉢	3.8	—	2.8	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	内面に資料写し付箋している
61	土器	小鉢	—	—	7.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半～14世紀初頭	口縁
71	土器	小鉢	—	—	6.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半～14世紀初頭	
81	土器	小鉢	—	—	9.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半～14世紀初頭	
91	土器	小鉢	—	—	6.4	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半～14世紀初頭	
101	土器	小鉢	—	—	6.6	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半～14世紀初頭	
111	土器	小鉢	—	—	8.2	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
121	土器	小鉢	—	—	2.6	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
131	土器	小鉢	—	—	1.1	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
141	土器	小鉢	—	—	7.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	側面輪足
151	土器	小鉢	—	—	2.8	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	側面輪足
161	土器	小鉢	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	口縁
171	土器	小鉢	—	—	9.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	側面輪足
181	土器	小鉢	5.0	—	3.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半～14世紀初頭	東北半球五瓣花
191	土器	小鉢	—	—	9.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半～14世紀初頭	
201	土器	中鉢	—	—	10.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半～14世紀初頭	2.1
211	土器	中鉢	—	—	10.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半～14世紀初頭	2.0
221	土器	中鉢	—	—	11.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
231	土器	中鉢	—	—	11.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半～14世紀初頭	
241	土器	中鉢	—	—	12.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
251	土器	中鉢	—	—	4.1	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
261	土器	中鉢	—	—	7.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半～14世紀初頭	側面輪足
271	土器	中鉢	—	—	7.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半～14世紀初頭	口縁
281	土器	中鉢	2.5	14.0	8.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半～14世紀初頭	口縁
291	土器	中鉢	—	—	18.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
301	土器	中鉢	—	—	12.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
311	土器	中鉢	—	—	1.7	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
321	土器	中鉢	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
331	陶器	蓋	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
341	陶器	蓋	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
351	陶器	蓋	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
361	陶器	蓋	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
371	陶器	蓋	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
381	陶器	蓋	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半～14世紀初頭	次輪
391	陶器	蓋	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
401	陶器	蓋	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半～14世紀初頭	側面輪足
411	陶器	蓋	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
421	陶器	蓋	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
431	陶器	蓋	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
441	陶器	蓋	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
451	陶器	蓋	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
461	陶器	蓋	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	口縁が若干残存、色絞り器、古い筆が口縁に対して平行に3条描かれる。
471	陶器	蓋	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	色絞り器、また3回転の糸巻が付く
481	陶器	蓋	—	—	—	レ	戸戸ノ裏面	13世紀後半	
491	陶器	瓶	—	—	21.0	レ	戸戸ノ裏面	13世紀中頃	ロクロ成型、本赤垂目、外赤、黄褐色、内面、褐色

## 土師質土器

遺物番号	種別	器種	高さ(cm)	口径(cm)	底径(cm)	出土位置	年代	備考
501	土師質	鉢	7.0	—	—	3.3レ	—	ロクロ成型
511	土師質	鉢	25.0	—	2.2	レ	—	ロクロ成型
521	土師質	鉢	—	—	38.0	レ	—	ロクロ成型
531	土師質	鉢	—	—	—	レ	天井一帯の赤垂目、ロクロ成型、7本垂目、波打たせ羽根目	
541	土師質	鉢	—	—	—	レ	波打たせ羽根目	
551	土師質	鉢	—	—	6.0	レ	ロクロ成型	
561	土師質	鉢	—	—	—	20.0	3.3レ	ロクロ成型、波打たせ羽根目

## 須恵器

遺物番号	種別	器種	高さ(cm)	口径(cm)	底径(cm)	出土位置	年代	備考
571	須恵器	高台付鉢	—	10.0	3.3	レ	10世紀後半	高台付、ロクロ成型、底部切欠き、底不明、高台貼り付け
581	須恵器	外付鉢	—	—	3.3	レ	—	高台、ロクロ成型、底部切り落し、底不明
591	須恵器	外付鉢	—	—	3.3	レ	—	高台、外付、平行引き目、内面、凹状印込み目
601	須恵器	外付鉢	—	—	13.0	2.5	レ	ロクロ成型、外付、平行引き目、内面、凹状印込み目
611	須恵器	蓋	—	—	18.0	17.25	レ	ロクロ成型

## その他

遺物番号	種別	器種	高さ(cm)	直径(cm)	底径(cm)	出土位置	備考
62	板	板瓦	—	—	—	3.3レ	斜田(裏面)「三年五月二日」
63	瓦	板瓦	2.9	12.1	1.5	3.3レ	斜田(共)

## 第4章 調査のまとめ

今回の調査は面積が狭小であったものの、安中城 I・IIに続き、安中城本丸南側の調査を行うことができた。その結果、中世期から近世期にかけて形成されたと考えられる堀・盛土を検出した。1トレンチの土層断面図から、この堀は複数回にかけて埋没し、盛土も崩落・再形成を繰り返したことが伺え、土壘であったと想定する。

堀の最底面は地表下約 4m であり、対応する盛土との高低差を考えると、急傾斜な深い堀である。出土遺物は見られないものの、こうした堀の形状から、この段階の堀・盛土は中世期に形成されたものと考えられる。続く段階の堀が形成される際には中世期の堀は既に埋没して平坦地となり、中世期の盛土であった部分へ再度盛土を行うことで、堀・土壘を形成していたと考えられる。この段階の堀は、天明 3 年の浅間山噴火（1783 年）に前後して複数回の小規模な埋没が起こり、最終的には完全に埋没したと考えられる。本遺跡の遺物の多くは、この浅間山噴火に前後した埋没過程で投棄されたものであろう。

次に、文献史料・絵図等の確認を行う。安中城は永禄 2 年（1559 年）に安中忠政によって築城された（山崎 1978）。しかし、長篠の戦い（1575 年）によって安中氏が滅亡すると、「安中亡び落城の跡、安中討死の末葉の士、民となり、武家・百姓の田畠作り場」（『上野志』）であったとされる。中世期の安中城に関する絵図等ではなく、城の全体像は不明な部分が多い。続く江戸時代には井伊氏が当地を治めることとなり、元和元年（1615 年）には井伊直勝が城の普請を行った（淡路 1981）。井伊氏より数代後に城主となった内藤政森は在職期間中（宝永二年～享保十八年（1705～1733 年））に安中城の改修を行い、城内に堀を再構築した（淡路 1981）。

以上、文献史と本発掘成果を照らし合わせると、中世の堀・盛土は安中氏時代に構築されたものと推測される。近世期の堀・盛土は、井伊氏または内藤氏のどちらかが改修した際のものと考えられるが、特定することは困難である。いずれにせよ、覆土の遺物は 18 世紀後半から 19 世紀初頭のものが大半であることから、古くともこの時期には埋没が始まっていたと想定でき、おそらく天明 3 年（1783 年）の浅間山噴火が画期であろう。なお、内藤期や明治期の絵図と本調査で判明した堀の走行状況は異なり、当時の堀・土壘の実態については今後の調査における課題である。

本遺跡の発掘調査の際には淡路博和氏にお越しいただき、ご指導を賜った。また、出土遺物のうち、陶磁器に関しては大西雅広氏から多くのご教示いただいた。ここに記して感謝の意を示したい。

### 参考・引用文献

- 淡路博和 1981 『安中藩』『上州の諸藩』（上）上毛新聞社  
井上慎也・深町真 2005 『植松・地尻遺跡』安中市埋蔵文化財発掘調査団  
堀 伸明 2011 『安中城 I・II』安中市教育委員会  
開口功一 2003 「第五章 奈良・平安時代」『安中市史』第二巻通史編 安中市市史刊行委員会  
千田茂雄 1990 『西町・谷津遺跡』安中市教育委員会  
千田茂雄 1991 『地尻・地尻 II 遺跡』安中市教育委員会  
山崎 一 1978 『群馬県古城里址の研究』群馬県文化事業振興会



写真1 1トレンチ全景

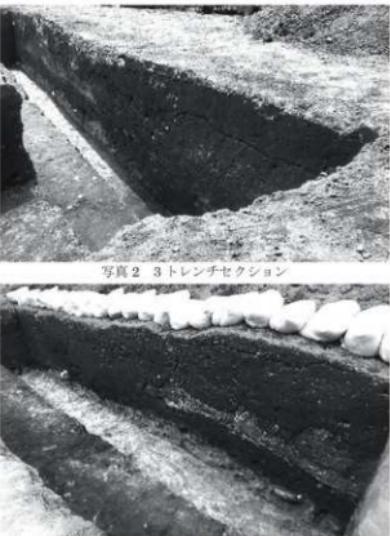


写真2 3トレンチセクション

写真3 4トレンチセクション



写真4 1トレンチセクション

## 発掘調査報告書 抄録

ふりがな	あんなかじょう さん							
書名	安中城Ⅲ							
副書名	安中地区学童クラブ建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
登次								
シリーズ番号								
編集者名	開根史比古、鳥居貴彌							
編集機関	安中市教育委員会							
編集機関所在地	379-0292 群馬県松井田町新堀245 TEL. 027-382-1111							
発行年月日	西暦2020年（令和2年）3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
あんなかじょう さん 安中城Ⅲ	あんなかじょう さん 安中市安中 3丁目宇西町 21-1	市町村 102113	造跡番号（略称） 1518 (D-32)	北緯 36° 32' 53"	東経 138° 53' 48"	20190507 20190515	455m <sup>2</sup> 学童クラブ 建設工事	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
安中城Ⅲ	城郭跡	古墳・古代	なし	土師器、須恵器				
		中世	塹 土堤					
		近世	塹 土堤					

(要約)  
 本遺跡では、中・近世期安中城の塹跡を検出した。調査区は『安中町延』等に掲載されている安中城図から見る限り、安中城南側の塹に該当する場所である。調査の結果、近世期の塹は、調査区の東西方向へ直線的に廻ることが判明した。安中城図では、東西方向から調査区内で南北方向に直角する塹が描かれていたが、図のようないくつかの塹の走行は認められなかつたため、正確な時期比定は困難であるが、近世期の塹との前後関係、塹の形状、安中城に關連する文献から中世期の塹と判断。

中世期の塹は、遺物がほとんど出土していないことから、時期比定が困難であった。しかし、深さ4m以上という塹の形状が一般的な中世期の塹と一致することや、近世期の塹との前後関係、文献資料等を考慮すると中世期に構築された塹と推定できる。

安中城Ⅲの発掘成果から、一部ではあるが中・近世期安中城の塹の実態が明らかとなつた。

### 安中城Ⅲ

一安中地区学童クラブ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一

発 行 日 令和2年3月31日

編集・発行 安中市教育委員会

群馬県安中市松井田町新堀245

印 刷 上海印刷工業株式会社

群馬県前橋市天川大島町305-1